



改 桃

本館蔵書
一



八遠 13
/ 687
/



1687

明治十七年四月六日
云海所尾所
本を求る

三州
藤原
三

本朝藤原氏事卷之一

目録

- 一 矢ひつる金子再も入大工
- 一 友らまが死ひと遂る囁詫
- 一 自身の證拠ハ隠家なき盜賊
- 一 非よ似つる理を云立の浪人
- 一 質物もあくの遠く樵石海

郷庭文庫

十
三
三

- 一 不審を肩よ知る本割れ本工系
- 一 念の兼用ハ恩あり科人
- 一 冥途の勅畧ハ小細工屋が願

本朝友誼比事卷之二目錄

本朝友誼比事卷之一

○ 失ひたる金子再びよ入大立

代々の賢き政を筆の林よそ傳りて今日のか
 此鑑となり。物のかくりりと拂ふこもぞう。國
 ゆさうよ民やすうなる春をむく蔽帯する本陰
 とのこし。前朝とかわれ拜しとかわれと。心しきを
 慕入唐土此書の名よ方うどと。倭必の極よ
 事と比へしより。それは似る書こそ聞かれハを
 沢湧れし事事の漏るをなまなく思ひ。なまき
 蘇の拙語。松が枝の考盤よかよ友友かこれまこ
 き陰のあくと字友とよ。忘れをやせんとあや

本朝友誼比事

卷一

二

一きき書しめぬ。なほ山城乃こも色路鳥坂
村は去六といつて大工あり。とき比ハ出入の音り
普徳もかく物音隙よて。わづらま娘のこも人
すべきやうなく。仲るの者といふも二年いぢり
岡東へ縁より。方こそ身の油を絞働さし。グ
天運のむろわく存の介他料と廻し。云は月
宿賃并に諸拂と仕廻金子百両三分儲たれハ
元子をわへゆり女房も悦むせ家と小奇羅
よ建ちして岡島と何やど買てのし胸算月
りて。尚四月十一日岡東と發是し金子百両紙
能つて之肌よつけ先も金三分を路決よして下

りし時道中何の心もかろり。今夜の光り
ハたすぐりも宿よても氣を絶らるなく。お
金おやど窮屈かおハなし。おとく思ひ知れ
るり。然るところよ富乃後し。うらあやしき男
二人大服指をよこし人訛声して。四自分ハ上かへ
光りあふとんころり。独り旅さそ淋し。かん身
とも電束おへみ紙なり。月乃しと燈り。りさ
いへ。去六一音各ハす。は風俗た。う渡磨の戻
とり入ねる者。と推し。そこくは挨拶。ところさ
まづらん。とすれども。彼二人の者危角。り一
よなり。先よめりて離れせん。が。氣の毒子。取よ思

不明な文字

巻ノ一

三

い。さくとしてすう一日の言ぬさきよ旅店よ泊り
物もおとく立出るよ又二人道は待つけ是夜よ
月乃すきば片おも心の所ゆとて金も命も安
徳よ古郷へ起しぬれと佛神よ祈誓し。老角
して水にの宿よ忍ぬ。家よ、仔細講ありよ夜こ
泊りする宿あればいよ一敷をぬしつら思案し
たりハ。氣子めりハをいへゆさ忍べ一是までハ二人
の明礼者とすう別糸ハをたれとも。今日の屋中
まけてハ洋を。所詮は金子といふは、身
枕よして立ゆり。かきこてうまで元よ来るべし
うよ別と。甚疾の用よ裏の敷此倍、此方

人の氣乃付ざりあよ百ぬれ金を握りよよなき
箒と目作よさし込置。今ハハ安し。翌日宿を
まおればあんのどく町んづきの松んつらり二人
の老つと出やよいに片六と揃へ其方我こと道
連よ、乗人車又方んよ合点なりんいそき肌よ
付くる金と後すべしと顔色と愛眼というけ
て云ければ片六こがけつら身して扱ハ是まで月
道よ、ハ我ハ金銀と持者くと思しめしこの
るがそれハを比ハは毎りなり。我ハ田舎三身よ
濱、岡東の親類を頼こよ下りしよいつて死敢
ずがも合かとしてせされば致すべまやうかく。

又すしつとちんへぬり。立所乃憐を文んふ。あま
も叶はずいぐを食よ。あまより外ハなく。いひは野
を見まんと丸裸よ。あまは包も開き給と。右
布子の名文をツカ外まひ。銭共三十みむりなり。
不便と思し。百下されませと。涙とがぐて云され。
二人の者入。此れえて。毛ハは肩賣初。川の目利
遠い。かやうれあさま。き男よ。二三日骨と。お
りの物。一さよ。其前。お遠ありま。僅か
着文と。先出す。入。半。あまは
ゆ。一。す。べ。い。ら。何。な。の。な。ド。こ。あ。れ。ば。ふ。便。よ。思
ふ。なり。た。ち。を。食。よ。も。あ。ま。ぬ。や。う。よ。く。せ。く。べ。と。勝

より。銭二百。あま。か。と。投。お。し。云。よ。も。あ。ま。お。そ。り。や。一。生。
よ。あ。ま。へ。ぬ。は。ま。り。者。捨。て。も。懐。よ。金。子。百。あ。ま。と。八。目。利。
す。り。は。後。は。ぬ。る。布。と。改。さ。バ。我。こ。仲。る。と。ぬ。く。だ。ま。す。べ
く。す。と。大。笑。し。て。ぞ。互。別。き。さ。る。老。六。は。漸。し。り。と。娘
く。是。を。あ。り。て。と。あ。ゆ。り。女。房。が。よ。右。の。次。米。を。あ。く
ゆ。り。ひ。及。よ。と。運。の。完。と。時。来。り。り。盗。人。よ。え。銭。二。百
あ。ま。え。ら。り。ま。今。稀。あ。り。仕。合。今。育。は。ま。く。体。め。め。水。口
の。停。留。備。省。へ。り。金。子。と。取。て。ゆ。り。百。あ。ま。の。う。く。し。の。あ。ま。を
せん。え。は。銭。と。酒。く。て。お。や。と。女。房。よ。酒。を。買。よ。や。り
な。ま。が。外。ハ。す。り。い。つ。酒。く。て。度。い。も。知。り。ず。収。ひ。後。入
よ。其。取。も。め。り。水。口。の。宿。へ。り。目。利。の。お。と。あ。ま。を。あ。り



恐ろしく、まはる私伏へ市橋村友を更しりしとて、あま
て、ヤザンの殺あせの刺ざりし。遺絨十七人押入さ
く、さい家来をさしり付。あまの胡椒巾をかぶ
せ。衣い形法しほの具いの身を此をどし金子の銭百両と紙銭後
黄同餘。うむいれ下男を人切し。その身を
負せ。十死一生にまうりあり。その遺人を此より曇
をわたり。かこらひえくよおまのへ。その人をもたれり
りたなく。行方あらず。迎むかりあり。此意怒り。此後
下されり。わりごとく。ま存はせ。

月日

市橋村
友を更しり

此後、ちりうく。此穿えん殺ころをまどごと。二十日あり。

あまこりたれ。わざと、囑まかせられたる。させらさる。
けそびの遺絨と訴人よあり。よおり。ただ、同執どうしつあり
とて。その料りょうとゆ。一、磨あみ。あして。黄令わうりやうの格かく下したる
ば。こい。知しる。れよ。あま。し。むれ。たれ。ごと。た。道みちあり。た。り
り。こ。あ。く。市。日。よ。あ。ま。り。訴。人。を。か。さ。り。た。り。又。此。の
案あり。り。て。の。囑まかせ。られた。入。ば。そ。び。の。遺い人。を
訴。人。の。こ。り。の。磨あみ。あ。して。黄令わうりやうの格かく下したる。と
だ。し。と。う。れ。を。そ。く。く。さ。せ。ら。さ。る。た。れ。ば。世。の。人。不。審
し。て。黄令わうりやうの格かく下したる。と。あ。ま。の。訴。人。格かく下したる。と。城しろわ
り。て。何なにと。て。か。ぶ。さ。し。と。此。の。法はふ法はふの。あ。る。殺ころめ。た。れ。と
こ。り。た。せ。し。と。の。わり。と。此。の。案あり。作しら。せ。し。と。

伏せ福人よ枝葉仕夜そあしを吟味仕はまて
よふたぬそれゆをり紙をきあしとお後しよふさ
しひ書付しよすそりわい進ひ地は断ちぢく内業
わりて四角八よ作付しよしひをま方あしあふ金
よぬぐひかた仕事せれも想を屋つ強きまじし
おけいそき換よしよふさそり知り老角これ
接ひよとれぬじしとぬしわさう先てますせの
ハ是地なく涙を流して返かきりたりそのいらひ
くふの涙人の筋目古よりそ尾のまをけのう
以河より進中知音ふより西玉へ方とお涙そのりみ
とせあきりわりて四角八方今三百両格看也扇

へ令子百両格看おきて此よりけり接ひ金より
あしひえ方の格四角八今こし生かたり地元の
魚漬くこととこ

○ 實地は苗の遠人 樞を海つ

思ひうら言とは私私入工初葉つとて若くそ樞を樞
馬借屋よ六七のまよりわりあつては雨よ去るま
久るま付書子を去人け渡せしう孫のそのう
屋賃よこかりいそて家より方へ私を箱を押し
おれいひ細工よかてしそ役もあはかく屋賃
およそす。あふ書子を湯合よ及び難儀仕は右
家より出されたる箱返しこれし屋よ作付し

三十二



かゝるく二重斗か子も死んどの死よおほひか
 不審なり申すは死なういひ申すもいひの桶をか
 かし物系しせと作甘うれはるはぬやそなりか
 地の前より桶の蓋をとりてこれだ。女の首いひのり
 子違ふか可成つを先してこれを言ふが娘の首いひのり
 リ可成つぬまかうらぬめてさうらう娘の首いひ
 たり目のうらぬ徳耳の下に甚根れぬの目さういひ
 い首をさういひぬらぬれかたしす。地は不審
 おかき申すは杖を申すをばれを方か下女死なう
 申すは理いひのり申すは申すは申すは申すは
 んこの女の腸いひのり申すは申すは申すは申すは

御座し返音遅く申すは申すは申すは申すは
 く掛回わりけれぬ。角あが女房と密通し
 何ぞぞ女房あがしぐし申すは申すは申すは申すは
 合せぬいひまをういひ申すは申すは申すは申すは
 さういひまそのいひを切じ申すは申すは申すは申すは
 申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは
 一とて角あが女房いひ申すは申すは申すは申すは
 ぬらう白ゆきをいひ申すは申すは申すは申すは
 申すは申すは申すは申すは申すは申すは申すは

○命の業利ハ殿あり科ハ

おまう言とはい私候は強掛屋林太夫と申す業利を

此邦の州十六日の夜とて一戸を焼くは火のれと
作と今船町内のもを焼くは火のれと
有難くそふれわつといひぬきとてそのいさく
一古まうてとから焼町は備毛はあわりのれと
れと有難はぬせんといふと有難くもねはぬ

月日

焼くは火のれと

地味さう一考し有難くして火のれとていふは
候なりと歸邦有難く候のれとていふは
いたづねあることなりと上けりといふこと
代より有難く候とていふは
此と有難の世活といふことなり

かく。家と賣拂ひの法子とて。そ人貪樂の崩
念とて一生終りてとて免候を極め十六日
法神作り。小僧屋とていふこと。南七猪め
いひ孫とていふこと。南七猪めとていふこと
りたり。いふ時。揚子賣賣の得とていふこと
おと。仕組めのり。毎とていふこと。いふこと
を家屋を賣すも。一家八九人の後世ゆり
細り。いふこと。いふこと。いふこと。いふこと
令報。いふこと。いふこと。いふこと。いふこと
た。いふこと。いふこと。いふこと。いふこと
れ。いふこと。いふこと。いふこと。いふこと

ち松うたり古らせりの火血くわく、瘡かさの形を体ていら。たは瘡かさ、
まうり式しき之これ又またよおさくめせよ。瘡かさひらき、たはくはあひ、
因よく考かうよ。色いろいふ中ちゆうへ、れをり、先まり、
血ち約やく作さけけら、色いろこら、とたは瘡かさ、
下したらく、ま、難がた下したま、ぬい、
と

月日

小畑屋平内判

此願このねがひ、
大おほよ、
比ひ、
やん、
射や、

い、
あ、
い、
あ、
い、
あ、

本館蔵此書卷之一

